

表1 ヒッグス粒子と大型加速器（LHC、ILC）をめぐる小史

年	発表、決定、進展等
1949	湯川秀樹ノーベル物理学賞（核力の理論による中間子存在の予言）
1960	南部陽一郎の「自発的対称性の破れ」理論（2008年ノーベル物理学賞）
1964	南部理論を基にロバート・ブロウト、フランソワ・アングレール、ピーター・ヒッグスがヒッグス粒子に関する路論（2013年ノーベル物理学賞）
2000	ヒッグス粒子以外の素粒子全部発見
2004	CERNのLHCが国際プロジェクトとして始動
2009	CERNのLHCが本格運用開始（第1期実験）
2011	米国の大型加速器がヒッグス粒子を発見できぬまま運転終了
2012	CERNのLHC国際チームがヒッグス粒子と見られる新粒子発見 ILCの技術計画書（加速器全長31~50km）
2013	CERNのLHC国際チームが新粒子をヒッグス粒子と確定 フランソワ・アングレールとピーター・ヒッグスにノーベル物理学賞 ILCの建設候補地が北上山地の岩手・宮城両県にまたがる地域に決定 日本学術会議はILCの日本誘致判断は時期尚早とし、2~3年の検討示唆
2014	文部科学省が有識者会議にILC検討要請 CERNのロルフ・ホイヤー所長が日本でILC建設を要望
2015	CERNのLHCがパワーアップし再稼働、第2期実験へ
2016	ILCのステイジング案（加速器全長当初計画31~50kmを短縮、将来延長）
2017	ICFA（国際将来加速器委員会）がILCの短縮案（加速器全長20km）了承 LCC（リニアコライダー・コラボレーション）のリン・エバンス最高責任者が日本の積極的誘致姿勢を求める
2018	東北ILC推進協議会が政府要請や情報発信強化、ILC受け入れ態勢マスタープラン概要版発表 文部科学省有識者会議が短縮案評価答申、同省は日本学術会議に再審議要請 仙台市や盛岡市、東京都や福岡市等でILC誘致をめぐる国際シンポや講演会
2019	欧州は新素粒子物理研究戦略(2020~24年)の検討開始

(資料) 河北新報、岩手日報等の新聞報道及び文部科学省有識者会議報告から